REPORT | 大手町・丸の内・有楽町 (大丸有エリア) が一体となって世界各国の映画と人の出会いの場に

「第 35 回東京国際映画祭」開催



東京のビジネスの中心地であり、多くの人が行き交う大手町・丸の内・有楽町(大丸有エリア)の街が映画祭のムードで盛り上がりました。

2022 年 10 月 24 日から 11 月 2 日にかけて開催された、第 35 回東京国際映画祭(TIFF)。 前年から日比谷・有楽町・銀座が開催場所となり、今年は丸の内エリアにまで拡大されました。 世界中から最新の話題作・注目作が集まり、連日たくさんの方が来場しました。

会期中には大丸有エリア一帯に映画祭のフラッグが掲げられ、近隣のワーカーやショッピングに訪れた人たちが足を止める様子も。コロナ禍を乗り越えた 3 年ぶりの一大イベントに、街一帯が映画祭ムードでにぎわいました。



NPO 法人大丸有エリアマネジメント協会(リガーレ)を事務局として発足した「DMO 東京丸の内」では、大丸有エリアにおいて「都心型エリア MICE」(Meeting、Incentive Travel、Convention、Exhibition/Event の頭文字を取ったもので、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントの総称)の誘致を行ってきました。

今回も、大丸有エリアの複数の施設と空間を活用して映画祭を盛り上げるとともに、国内外からの多くの業界関係者や来街者に大丸有エリアの街の雰囲気も楽しんでいただきながら、各映画やレセプションに参加いただきました。

### ●東京国際映画祭のハブとなる「交流ラウンジ」



丸の内仲通りに面する「有楽町 micro FOOD & IDEA MARKET」では、普段は街の憩いの場としてフードやイベントを通じた出会いを提供していますが、会期中は映画祭の特設エリアに。世界各国の業界関係者のコミュニティ空間として活用され、多くのゲストを迎え入れました。

関係者が気軽に立ち寄り交流したり、トークショー会場としても使われ、映画人の思いを発信する場に。映画祭のパス保持者のみが入場できる会場だったものの、エリア中心の通りに交流地点を設けることで、にぎわいは街全体にも沁み出しフェスティバルを盛り上げる起点となりました。



店内のカフェでは、世界各国から集まった参加者をもてなすため、同店の名物でもある国産牛を使ったカレーや特別メニューが提供されました。「有楽町 micro FOOD&IDEA MARKET」の店長である長谷川貴之氏がイベントのために考案したのが「おにぎらず」。多忙なイベントの途中でも手軽に食べられ、かつ海外の方にも米と海鮮を味わい、日本を感じていただける食事を楽しんでほしいという思いが込められています。



#### ●映画づくりのエネルギーが感じられた「TIFF ティーンズ映画教室」

「有楽町 micro FOOD & IDEA MARKET」では、10月30日に「TIFF ティーンズ映画教室」のスペシャルトークショーも開催されました。2017年から続く、子どもたちが中心となって映画を作り上げるワークショップです。歴代の講師である諏訪敦彦氏、大九明子氏、三宅唱氏、瀬田なつき氏、早川千絵氏に登壇いただき、受講生も集まるメモリアルな場となりました。

イベントでは『1 人ぼっち BOX』(2017年)、『15 の夏』(2018年)など、過去の作品を見ながら、制作当時の思い出話に花が咲きました。「子どもたちには考えながら撮影を行うようにと伝えました。苦しいけれどもクリエイティブな体験になったと思います」と諏訪氏も目を細めました。



2020年以降は、新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンラインでの開催だったため、参加者が一堂に会するリアルイベントは久しぶりとなりましたが、歴代の参加者が集まることで対話も生まれ、新たなつながりができたようです。

#### ●道行く人も思わず足を止めるオープンスペースでのトークショー

丸ビル1階のマルキューブ(MARUCUBE)オープンスペースもスペシャルトークショーの舞台です。全面がガラス張りの5層の吹き抜け空間には外からの光が差し込みます。丸の内仲通りにもイベントの雰囲気が伝わり、食事や買い物で訪れた人々がイベントを眺めるなど、誰もが映画祭の盛り上がりを感じられる場となりました。

## 福島浜通りでの映画づくり①「福島浜通り地域に創造が広がるために」



本広克行監督をメインゲストに、丸山靖博氏、志尾睦子氏、東あすか氏、谷賢一氏、森谷雄 氏ら、地域での映画祭で活躍するメンバーが集まり、映画で地域を盛り上げる方法について 語りました。

# 『ある男』×『百花』日本映画、その海外での可能性



『ある男』がベネチア国際映画祭に出品された石川慶監督、『百花』がサンセバスチャン国際映画祭で最優秀監督賞を獲得した川村元気監督のお二人に、海外での日本映画の可能性を語っていただきました。

## 爆竜戦隊アバレンジャー20 周年特集



スーパー戦隊シリーズ『爆竜戦隊アバレンジャー』のトークショーに多くのファンが詰めかけました。2階・3階からステージに向かって手を振る人や、会場の外からガラス越しにイベントを確認する人の姿も多く、一番のにぎわいを見せました。



会場を移動する途中でもフラッグや看板などにより、街全体が映画祭の空気を作り込んでいました。 期間中は天候も良く多くの人でにぎわいました。

夜には、「有楽町 micro FOOD & IDEA MARKET」交流ラウンジでのパーティーが開かれ、 久しぶりのオフライン交流や再会に喜ぶ気持ちを交わし合いました。世界各国から集まる 人たちのために用意されたこだわりのヴィーガンフードは盛況でした。





東京国際映画祭プログラミンググループ担当の田中文人氏は、「今回初めて丸の内エリアで開催しました。街全体が開かれ活気も生まれています」と、街全体で取り組む映画祭に手応えを感じたようです。「街の雰囲気によって映画祭の雰囲気も変わります。都会の中心にあ

りながら緑もある。複数拠点を行き来することで、エリアの良さも味わってイベントを楽しんでもらえれば」と語りました。

DMO 東京丸の内が目指す「都心型エリア MICE」では、国際的なイベントや会議の場だけではなく、公共空間も利用しながら、大丸有エリアに訪れる人たちが気軽に参加できる空間をつくります。国内外の来訪者に「またこの地に訪れたい」と思っていただけることを目指し、今後もエリアの連携を高め、街の魅力を伝える取り組みを進めます。